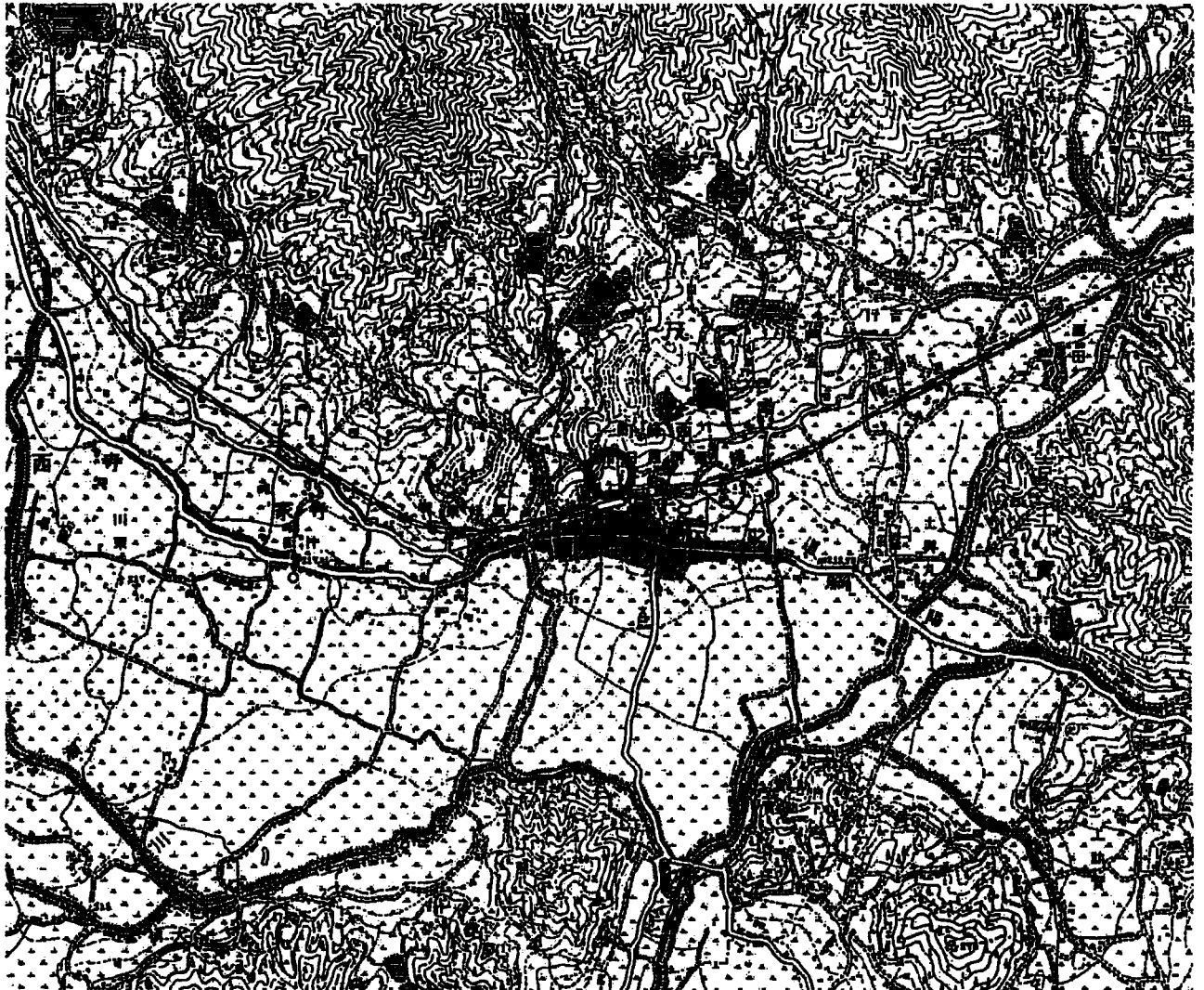


御建遺跡発掘調査見学会



平成20(2008)年12月14日(日)

財団法人東広島市教育文化振興事業団

東広島市教育委員会

はじめに

御建遺跡は、東広島市西条町西条に所在する中世から近世までの複合遺跡です。

西条駅北線街路整備に伴う埋蔵文化財の調査の一環として、平成20年11月から12月までの2ヶ月間の予定で発掘調査を行っています。

この遺跡は、宿場町遺跡として著名な四日市遺跡とは山陽本線の線路をはさんですぐ北側に位置しており、東方約500mには史跡安芸国分寺もあります。

調査地点は、2ヶ所に分かれており、合計でも500㎡足らずの狭い範囲の発掘調査でしたが、古代から近代に及ぶ遺跡の宝庫だけに、その成果が注目されていました。

調査は、2ヶ所の調査区内、西側のものをA区、東側のものをB区として実施しました。西側のA区は、小高い丘陵の東側斜面に位置し、室町時代から安土桃山時代頃の山陽道と思われる道路跡を確認しました。一方のB区は、北から南に延びたなだらかな丘陵の先端低地部に位置しており、室町時代の土坑や建物跡の一部のほか、江戸時代末期の溝や土坑が見つかりましたが、保存状態が悪く、詳しいことは明らかにできませんでした。

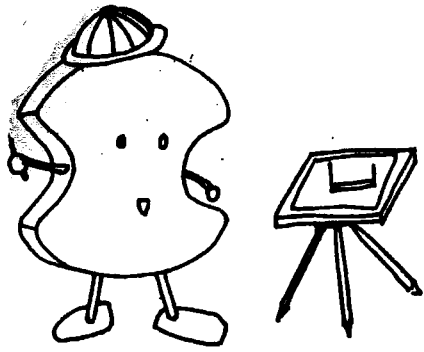
さて、御建遺跡周辺の遺跡の状況ですが、遺跡周辺では、史跡安芸国分寺跡をはじめ、大地面遺跡や青谷1号遺跡など、奈良時代から平安時代初頭の寺院・官衙的な遺跡が数多く分布しています。

中世には、西条盆地周辺は東西条（とうさいじょう）と呼ばれ、盆地の東側が東条郷、西側を西条郷として、JR西条駅の西側を流れる半尾川を境としていました。御建遺跡は東条郷の内、現在の吉行・土与丸・助実などからなる、寺町村と呼ばれる大村の一部でした。残念ながらその頃の様子は良くわかっていません。

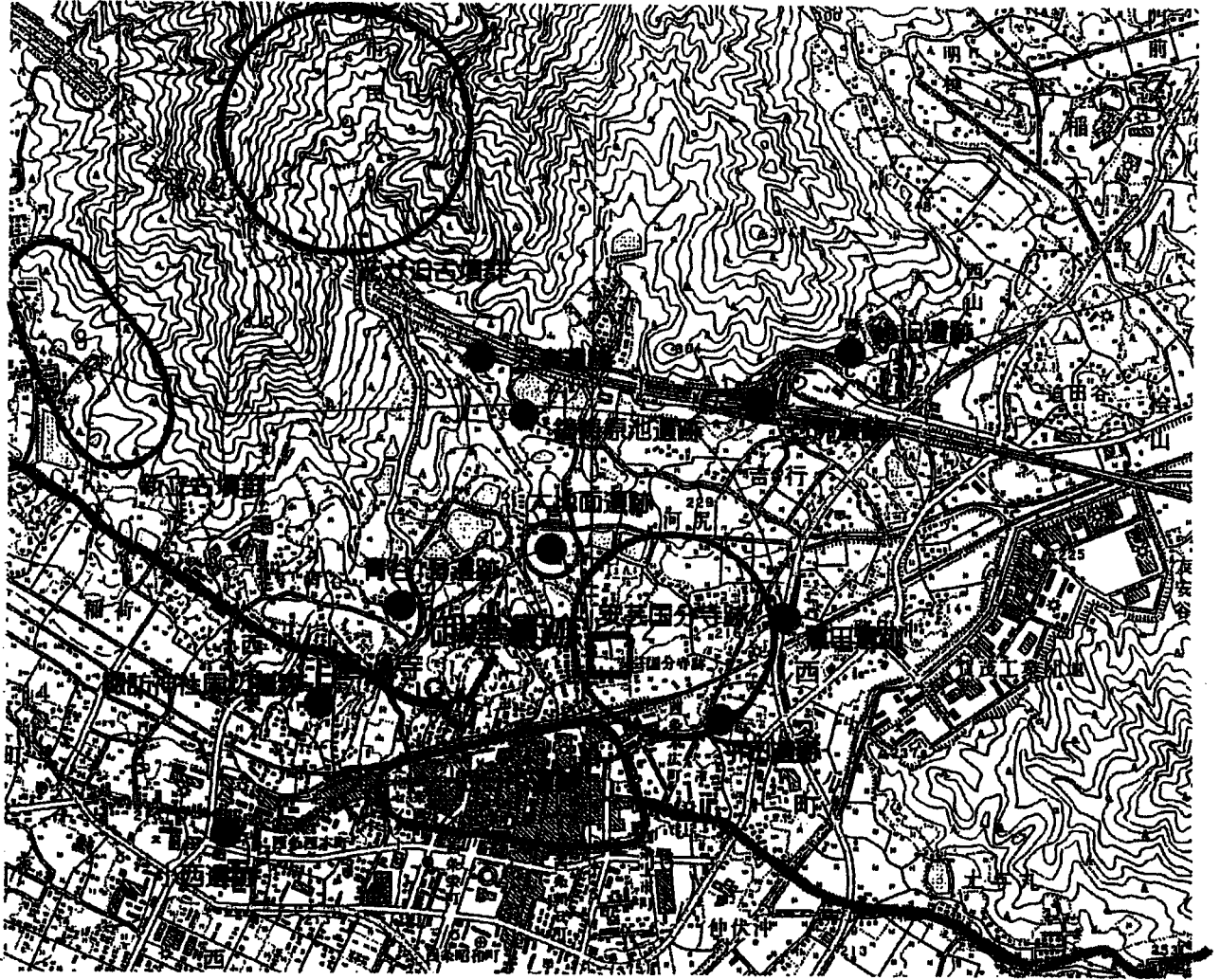
四日市の地名が初めて文献に記されるのは、1575（天正3）年のことです。薩摩（鹿児島県）の武将島津家久が伊勢参官の行程を記した「中書家久君上京日記」に四日市を通過したことが記されています。また、文禄年間（1592～1596）には「四日市目代」と呼ばれる、毛利氏支配下で市の管理を行う役人が置かれていたことがわかっています。このようなことから、16世紀後半には、四日市が山陽道の宿場町として発展してきていたことが窺われるのです。



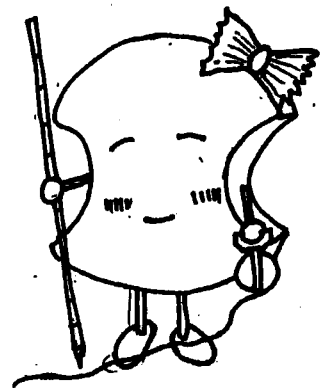
遺跡から見た西条駅と四日市



ふんちゃん



周辺遺跡地図



ふあんちゃん

見つかった遺構

A区

西側の丘陵斜面に位置するA区では、戦国時代の山陽道と思われる道路跡とともに、溝跡や土坑、柱穴などが見つかっています。

道路跡・・・東北東—西南西に降っていく道路跡です。長さ約10mを確認しました。幅は約2mで、両側に浅い側溝を持ち、路面は硬く踏みしめられていました。中央がやや窪んでおり、水が流れることもあったことがわかります。周辺からは切り通し状になっており、道路が整備される以前に段状の平坦面が造られており、その段を掘り割って道路が造られた様子がよくわかります。

道路跡を埋めた土の中からは、土師質土器の鍋や播鉢、茶釜などのほか、備前焼の平皿や播鉢、壺、中国製の青磁や青花の椀・皿、李氏朝鮮の灰釉椀などが出土し、安土桃山時代から江戸時代の初めには、道路としての機能が失われたことが明らかになりました。

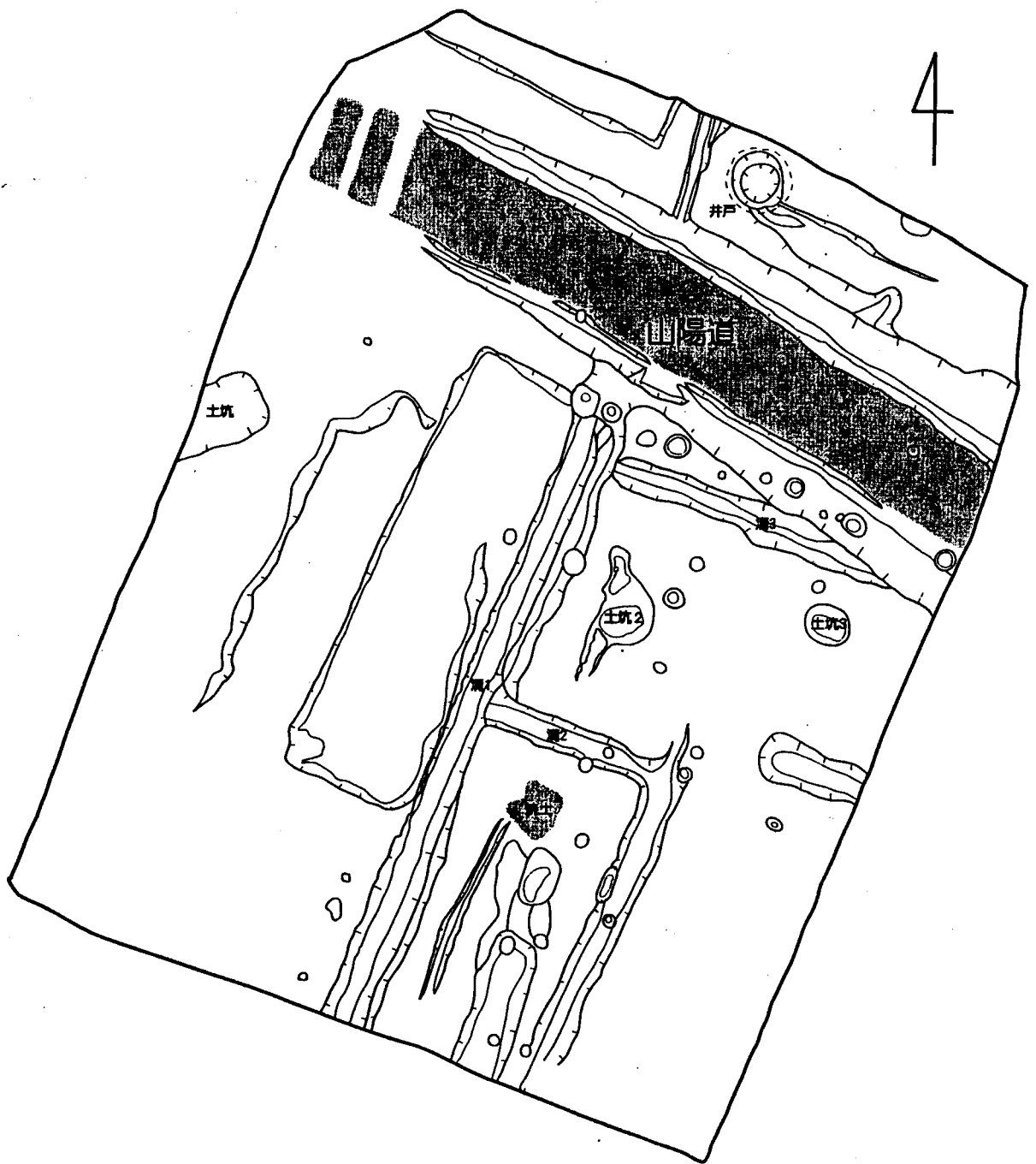
溝跡1・・・調査区を南北に縦断する溝跡です。道路跡によって分断されており、道路が整備される以前に機能していたことが明らかになりました。しかし、残念なことに出土品が何もなかったことから、いつ頃機能していた溝なのかは、不明なままです。

溝跡2、3・・・溝跡1から東側に枝分かれする溝跡です。出土品がなく、やはり時代・性格は明らかではありません。

土坑・・・調査区の西端で見つかった方形の穴です。中からは、松の丸太が3本、太い針金でくくられた状態で出土しました。針金が斜め上方に伸びていたことから、塔のような背の高い構造物を突っ張るための重石として作られた可能性があります。作られた時代は、明治から昭和初期の近代です。

井戸跡・・・調査区の北端で見つかった素掘りの井戸です。直径は約1mですが、深くなるにつれて、フラスコ状に広がっています。深さは2m以上になりますが、不明です。





A区遺構配置図 S=1/100

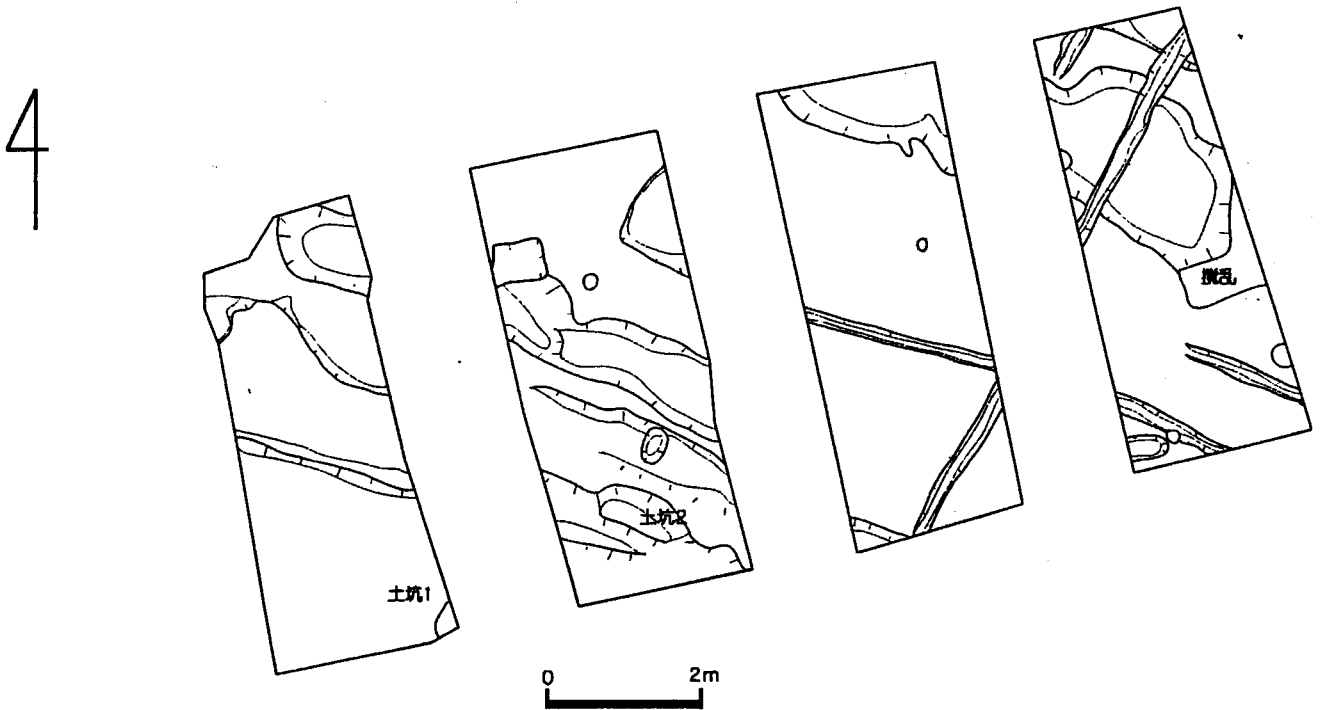
B区

ビルの基礎によって大きく破壊されており、遺跡の詳細についてはあまり明らかにすることができませんでしたが、それでも、土坑や溝跡、井戸状遺構のほか、建物の一部と思われる柱穴などが見つかっています。

土坑1・・・後世の水田造成によって半壊していますが、元は長方形の穴だったと思われます。何のためのものかは明らかではありませんが、室町時代頃の土製茶釜が出土しています。

土坑2・・・19世紀頃のハウロクや土製かまど、瓦などが出土した穴です。水田として造成された後、土器などが廃棄され、その後、水田化したものと考えられます。

井戸状遺構・・・コンクリートの基礎によってほとんど破壊されていますが、規模や形状から井戸であったと考えられます。出土品はありませんが、埋土の状況から中世の遺構と思われます。



B区遺構配置図 S=1/100



発掘調査の成果

御建遺跡の発掘調査で最大の成果は、やはり戦国時代の山陽道と考えられる道路跡が確認されたことでしょう。

A区で見つかった道路跡は、戦国時代の山陽道と推定される道路です。なぜ、そのように考えられるのか、その根拠をいくつか挙げながら、発見の意義について考えていきましょう。

西条盆地を通る古代の山陽道は現在まで定説とされるルートは確認されていません。その中で最も有力なルートが、「上道」（うわみち）と呼ばれる、平岩から西条四日市まで盆地の北側山沿いを一直線に延びるルートです。古代山陽道は、幅が12m程もあったとされ、その上、直線で結ばれるのが特徴でした。直線で結ぶためには、低地は埋め、丘陵は切り通さなければなりません。丘陵部の切り通しは、古代の道路を見つけるための有力な手掛かりとなっています。

現在のの上道は、車の離合も困難な道幅しかありませんが、車道よりも一段高い所に古代の切り通しと推測される幅の広い切り通しが残っています。

御建遺跡で確認された道路はこの上道の延長上に位置しています。道幅は約2mと狭いのですが、自動車はもちろん、荷車も使われることのなかった当時では、十分な道幅だったのです。

西条の四日市は、江戸時代には西国街道（山陽道）の主要な宿場として、御茶屋が置かれ、参勤交代の大名の宿泊地として利用されていました。この宿場の遺跡は、西条駅前土地区画整理に伴って発掘調査が行われ、江戸時代の四日市の様子がある程度明らかになりました。そこでは、西国街道沿いに建ち並ぶ町屋の地下遺構がよく残り、町割り（都市計画）の様子や町屋の間取りまでわかるものもありました。

ところが、江戸時代よりも前の安土桃山時代の遺構は、その町割りとは明らかに異なっており、江戸時代の西国街道の下にも建物跡があることが明らかになりました。

幕末の医者で学者の野坂完山が記した「鶴亭日記」によれば、慶長4(1599)年に四日市の町割りが行われたとされており、町割りが異なるのは、その頃の都市計画によるものと考えられます。

このことは、江戸時代の西国街道と戦国時代の山陽道が違っていることを意味しているのです。

四日市が初めて文献に現れるのは、はじめにでも書いたように、天正3(1575)年のことです。島津家久は、詳細な旅日記を書き残していますが、彼が四日市を通ったのは、下関からの船便が悪かったためです。そこで、陸路山陽道を歩いて長門、周防国を過ぎ、厳島参詣などをしながら、広島付近では、太田川をさかのぼり、八木の渡しを渡って深川から志和に出て、志和西村で1泊し、今坂峠を越えて四日市を通り、松子山を越えて田万里市で宿泊しています。

古代以来、山陽道は八本松と瀬野の間の大峠を越え、安芸中野から府中を通り、牛田から沼田を経て五日市に抜けていました。中世になると、海田から海岸沿いを通る道が発達し、こちらが山陽道になっていきます。しかし、太田川の河口付近は三角州で湿地が広がっていたことから、九州方面からであれば、宮島や廿日市、草津などから船で海田・矢野に渡るルートと太田川の西岸を北上して、八木の渡しで太田川を渡り、志和に抜けるルートがあったようです。

島津家久は北上ルートを選んだわけですが、いずれにしても二つのルートは西条盆地に入り、八本松町の飯田で合流します。この合流地点付近には、戦国時代、安芸国を支配した大内氏の賀茂郡代の

城と考えられている土居遺跡などがあり、交通の要衝として意識されていたことは間違いありません。

さて、島津家久が、確実にこの道を通ったことは、彼の記述からも知ることができます。家久は、四日市に入る前に、左の方にかすかに白山城が見えると書いています。高屋町白市の白山城はそれほど高い山ではなく、江戸時代の西国街道を通ったのでは、前方の丘陵にさえぎられて、四日市に入る前に白山城を見ることは不可能です。しかし、現在の西条駅東側の跨線橋からは、かすかに白山城跡を見ることができるのです。このことから、家久は北西側の丘陵部から四日市に下って来たのだということがわかるのです。

次に四日市が文献に現れるのは、天正15(1587)年のことです。この年、天下統一を目指す豊臣秀吉が、薩摩の島津氏を攻めるために九州に下向する際、四日市に宿泊したことが、「九州御動座記」、「楠長譜下向記」などに記されています。秀吉は、天正15年3月1日、大坂を出発し、姫路や岡山を經由して、3月12日、備後赤坂、翌13日は三原に宿泊し三原城で一日休息したのち、3月15日に四日市に宿泊しています。その後、海田、廿日市と進み、厳島参詣ののち、周防府中(防府)などを経て、3月25日に下関まで至っています。

当時の記録では、秀吉が泊まった具体的な場所までは記されていませんが、江戸時代末期の広島藩の地誌である「芸藩通志」によれば、四日市の且過寺跡が太閤秀吉の宿泊した地と伝えられていることが書かれています。且過寺跡は、御建グラウンドの西、御建遺跡から数十mの場所です。小高い丘の上であり、付近では最も見晴らしのよい場所です。見つかった戦国時代の山陽道からは坂道を20mほど登るだけの場所であり、秀吉の移動ルート上とあってよいでしょう。

且過寺とは、もともと修行僧などが修行の旅の途中宿泊するための施設をいいます。修行僧が利用しやすいように交通の要衝に設けられるのが普通で、四日市の且過寺もその条件は満たします。

では、秀吉もそのような宿泊施設に泊まったのでしょうか。

秀吉は、九州出兵にあたって、沿道の大名に宿所を整備するよう命じており、城以外に宿泊する場合、中国地方では毛利氏が、宿所を整備・新築していました。四日市の且過寺も場所こそ伝承地でよいと思われませんが、当時は極めて短期間ながら、立派な御殿が建っていたことでしょう。

このような当時の記録類などから、御建遺跡で見つかった道路跡が戦国時代の山陽道だったことは、ほぼ間違いのないと思われれます。この道路跡は二度にわたって埋められたことが土層の観察から窺えますが、一度埋められた道が再び幅を狭くして、しばらく使われていたようです。しかし、二度目の道はあぜ道のような狭い道でした。道路跡を埋めた土の中からは、下層では室町時代から安土桃山時代の土器や陶磁器、上層では江戸時代初頭の土器や陶磁器が出土し、道路としての機能を失ったのが安土桃山時代から江戸時代の初頭であることが明らかになりました。このことは、江戸時代の西国街道が整備された時期と重なることを示しており、道が廃絶した理由が西国街道の整備にあったことを意味しているのです。

古代の山陽道が残っていなかったのは残念ですが、戦国時代の山陽道が確認されたことによって、周辺の遺跡が、当時の交通路と密接に結びついていたことを改めて私たちに教えてくれているのです。